永泉

日本基督教団瀬戸永泉教会　会報№259　2023年4月9日発行

巻頭説教　「旧約聖書における神の赦し」　横山厚志牧師

主はモーセにいわれた。「前と同じ石の板を2枚切りなさい。わたしは、あなたが砕いた、前の板を書かれていた言葉を、その板に記そう。」（出エジプト記34：1）

私たちが持っている聖書は、旧約聖書と新約聖書があります。新約聖書には、イエス様の十字架の愛が書かれてあります。しかし、旧約聖書は神の厳しさばかりで、そして戦争のことばかり書いているから嫌だという思いが私たちにはあると思います。そのような中で、私たちが旧約聖書を読む意味について考えてみたいと思います。

日本基督教団信仰告白には、「我らは信じかつ告白す。旧新約聖書は、神の霊感によりて成り、キリストを証しし、福音の真理を示し、教会の拠るべき唯一の聖典なり。されば聖書は聖霊によりて、神につき、救いにつきて、全き知識を我らに与ふる神の言にして、信仰と生活の誤りなき規範なり。」とあります。この信仰告白には、聖書は旧約聖書と新約聖書を合わせて、聖書であるといっています。聖書は、新約聖書だけでは、聖書として成り立っていないのです。旧約聖書を含めて、聖書として成立しているのです。

新約聖書の中で、イエス・キリストの愛を示す言葉は、次の言葉だと私は思います。ルカ23：34「そのとき、イエスは言われた。父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」イエス様は、十字架の上でこの言葉を言われました。十字架の目の前には、イエス様を十字架につけた祭司長たちや民の長老たち、律法学者たちがいて、イエス様をあざ笑い、侮辱していました。その彼らのために、イエス様は神に祈っているのです。イエス様は「敵を愛しなさい」と言われました。その言葉を、ここで実践しているのです。自分を十字架刑にした者たちのために、祈っているのです。イエス様の愛の大きさを感じます。このイエス様の十字架上の祈りは、私たちのための祈りでもあります。罪を犯した者を赦していく、イエス様の大きな愛が、そこにはあります。

さて、旧約聖書には、神の赦しはないのでしょうか。上記の聖書の箇所は、イスラエルの人々が、エジプトを出て、荒れ野の旅をしている時、シナイの荒れ野にいた時に、神はイスラエルの人々と契約を結ばれたのです。神は、イスラエルの人々の神となり、イスラエルの人々は神の民となったのです。神の民の証として、神はシナイ山の上で、モーセに十戒を与えました。素晴らしい祝福に満ちた日になるはずでした。その時に、イスラエルの人々は、まことの神を忘れ、エジプトの神々であった金の子牛の像をつくって、拝んでいたのです。十戒の第2戒に「あなたはいかなる像も造ってはならない。」とあります。それを破ってしまったのです。神は激しく怒り、イスラエルの人々を滅ぼすとモーセにいわれました。モーセも怒って、神からいただいた十戒が書いている2枚の石の板を、イスラエルの人々の前で、叩き割ってしまったのです。それでも、モーセはイスラエルの人々の罪の赦しを、神に願い求めます。そのためには、自分が神に裁かれてもいいとさえいっています。神は、モーセの祈りに答えてくださり、イスラエルの人々を赦されるのです。そして、モーセが怒りで叩き割った2枚の石の板をもう一度、新しい2枚の石の板に十戒の内容を、神ご自身が書いてくださるといってくださっています。

旧約聖書には、実は多くの神の赦しが書かれてあるのです。確かに厳しい場面も多くあります。戦争のことも多く出ています。それでも、神の救いといいますか、赦しの部分が多くあるのです。祈祷会では、旧約聖書の創世記から読み始めて、今は、申命記に入っています。読んでいて、いかに、イスラエルの人々の罪が深いのか、神への反抗に対して、いかに神が愛を持って、接してくださっているのかを知るのです。

建築委員会

愛知まちなみ建築賞受賞のご報告とお祝い

柳澤　力建築士

このたび瀬戸永泉教会が、第30回「愛知まちなみ建築賞」を受賞しました。例年を超える80点の応募作品の中から、受賞8作品の一つに選出されたものです。同賞は愛知県の主催で、建築主／設計者／施工者の3者に贈られる賞です。『良好なまちづくりを進めていくためには、建築物及びまちなみが地域環境の形成に積極的に関わり、一定の社会的役割を果たしていくことが重要であるという認識の下、（中略）次の基準のいずれかに適合し、かつ社会的貢献度の高いものを選考する。』とあり、選考基準は下記4項目で、更に詳細な項目がその中にあります。

①地域における新しい建築文化の創造に寄与しているもの

②地域のまちなみに調和し、魅力的な景観の形成に寄与しているもの

③魅力と潤いのある空間の創造に寄与しているもの

④その他、本賞の趣旨に適合し、地域に貢献しているもの

審査委員長だった名古屋大学の太幡先生から伺った話では、審査総評のとおり議論になった作品もある中で、瀬戸永泉教会さんは満遍なく全審査委員から票を集めていてすんなり決まったとのこと。毎年この賞は「新築」の物件が受賞する印象だった為、正直なところ「改修」でこれだけの評価をいただけたことには少し驚いています。

では評価された点を読み解いていきます。この賞は外観や外構が主なターゲットですが、バリアフリー化や地域コミュニティ形成への寄与も重視されます。そのため今回の改修で、塀を無くして外部を開放的にしたこと、外構及び建物のバリアフリー化をしたこと、地域のギャラリー的な場にもなり得る側廊やブラウジングコーナーを創出したこと等により、教会員の皆様のみならず広く地域に対し貢献できる可能性が広がったと評価いただけたのかもしれません。

また、雑草対策の被覆資材として地元の瀬戸砂利を選択し、床下束石や旧門柱、昔の本業敷瓦や屋根瓦を外構に再利用し、寄贈された旧名古屋市電の石畳を緩やかな階段に活用すること等を、教会員の皆様が快く認めて下さったことも、地場産品の活用や地域文化の継承に寄与したとして、小さな事の積み重ねではありますが評価ポイントにつながったのではと思います。

そして何より、2006年から長い時間をかけて議論され、築120年の礼拝堂を耐震改修して継承すると皆様が選択されたことこそが、歴史ある街並にとって非常に意義ある多大な貢献をされたと認められたことは疑いようがありません。しかも、明治村のような「凍結保存」と言われるハードだけの保存ではなく、ここでの皆様の祈りと生活の場が明治から100年以上続けられてきて今後も続いていくという、ソフトが伴う改修だったことが、街にとってかけがえのない財産であるとご判断いただけたのだと考えます。

冒頭にも書きましたがこの賞は、建築主である瀬戸永泉教会の皆様方が受賞された賞になります。もちろん、非常に難しい施工を熱く、かつ丁寧にやり遂げて下さった中島工務店の皆様の献身的なご協力のお陰でもあります。授賞式には故吉川氏の写真と共に臨ませていただきました。設計者としてメニューを色々考えはしましたが、自分で決めていったという感覚は今回不思議と全くありません。もちろん皆様の長期間に渡るご議論とご決定の賜物なのですが、どこか自然と導かれ決まっていったという印象もあります。改めて、瀬戸永泉教会の建物と皆様に心より感謝申し上げます。この度の受賞、誠におめでとうございました。

長老の証

“御心を・・・”　　K・R長老

主なる神、あなたは造り主、私たちの父、あなたは素晴らしきお方です。あなたは私たちのことを私たち自身よりもよくご存じです。ですから、あなたは私たちに本当に必要なものを与えてくださいます。主イエスがご自身の死と復活を予告されたとき弟子であるペトロは主イエスをわきにお連れしていさみ始めたとあります。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」主イエスは言われました。「サタン、引き下がれ。あなたは私の邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている」（マタイ　16:22-23）非常に厳しいお言葉です。その言葉をペトロはどう感じたでしょうか？

弟子たちは当時、ローマ人に支配されていたイスラエルの民を救世主=メシアがローマから解放してくれることを強く望んでいました。またより多くのイスラエルの民がそう信じていたのかもしれません。そのメシアと信じていたお方が主イエスだったのです。その主が捕らえられて死んでしまうこと、それはあってはならないことだった。それは弟子たちの期待を裏切ること。でも僕はペトロが主イエスをいさめた理由はそれだけではないような気がしてならないのです。主イエスに招かれて、漁師をやめ、他の弟子たちとともにつき従って旅を続けていた。主イエスの権威ある教えと多くの病人への癒しと奇跡、そっと触れただけでその人の生い立ちからすべてを知り、哀れみ、そして罪を許してくださり、その悲しい困難な状況から救い出してくださった、その愛の業、一つ一つを目の当たりにして神の栄光を感じ取り、寝食を共にして、と

もに喜び、ともに隣人を哀れんでくださったお方、それが主イエスだったのだと思います。

まさに神の子であり、親しみを感じ、憧れであったお方。主イエスをペトロは愛し、尊敬していたに違いと思います。だからこそ、”そんなことがあってはなりません”と言ったに違いないと思うのです。まさに私たちが愛する者をなくしてしまいそうになる時、その時に思うことをペトロも強く感じたのではないかと・・・。

ではなぜ主イエスは自分を愛し、尊敬してくれる一番弟子のペトロに対してそんなひどいと思えるような言葉をおっしゃったのか？　“サタン、引き下がれ”とおっしゃるとは。主イエスが宣教を始められる前に40日間、断食をして、悪魔の誘惑を受けられた聖書の箇所を思い浮かべました。神でありながら、人でもあられる主イエスは私たちの感じる苦しみ、悲しみを感じておられました。空腹時に石をパンに変えること（必要を得ること）を、神を試みること（愛されているかどうかの疑問）を、悪魔に従って繁栄を手に入れること（欲望を実現させること）ができるというその誘惑を。

ゲツセマネでの祈りにあるように十字架は主イエスにとって本当に苦しいものでした。だからこそ、主イエスは”主よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください”と祈られたのだと思います。そしてペトロの師である主イエスを思い、心配する、愛のあるように聞こえるいさめる言葉はご自身を神の御心に従う決意から引き離そうとする甘い蜜のようなサタンささやき＝誘惑に聞こえたのではないでしょうか？

“しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに”主イエスは祈られました。私たちは自分自身のことも多くは知りません。ましてこれからどうなることかは特に。主イエスは御心を知っておられました。ペトロは知らされていなかった。いや、気付かなかった。私たちはペトロと同じです。目の前にある苦しみ困難から、自分が正しい思うこと、感じることだけに心が奪われる。主イエスの十字架の意味がすべてを語っています。御心がどこにあったのかを。そして死に勝たれ、復活された主イエスが私たちの希望なのです。私たちが今苦しいとか悲しいとか困難にあるとか、主なる神が私たちをご自分に向かわせるためにまた、祈らせるために。全て、順調な時には思い上がらないために自分を神としないために。御手につながらせるために。隣人の悲しみ、苦難や不幸は私たちが主イエスの愛の業を行うために、隣人を愛するために主が用意されたものかもしれません。

イースターの思い出

救いの手　　H・R姉

イースターの朝はＣＳの子供たちが色とりどりのセロハンに包んだゆで卵を持って教会内を歩いていて賑やかな活気ある光景を思い出します。

「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」

クリスマスとイースターの出来事は私には驚きでした。神様は愛する一人子を私たちの罪の身代わりとして十字架につけそれで終わりではなく死んで３日後に復活させられました。驚きです。人間には到底できることではありません。考えつくこともできません。

そして復活は罪深い私達に立ち上がる力と前に進む希望を与えられました。今も生き続けておられるイエス様が困難の中にいる私達と共にあって下さっているのです。

私は人生最大の危機の中にあった時３人の信友（信仰の友）が与えられました。年齢も環境も仕事も血液型も違う私達に共通することはイエス様のもとに集まっていたということだけです。その頃私は一人で自分の力で困難をなんとか解決しようと毎日ほとんどの時間をそのことで費やし祈ることをやめてしまっていました。

「わたしはあなたがたをみなしごにしてはおかない」

そんな私の日々に不思議に４人集まって祈る時と場所を与えられお互いの名を呼んでイエス様の名を通して祈る時平安を与えられました。信友の１人が伝道師を志していたこともあって年１回地方の教会に証しをしに行くときは４人揃って出かけ証しを聞きその教会の教会員達と主にある交わりの時を過ごし帰りには観光をして、ちょっとした日帰り旅行ができたことは私にとって気分転換になりました。

神様は困難の中にいる私達をいろんな方法で救いの手を伸ばして下さいます。

「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」

聖書の豆知識

福音書の成立　　小椋　実央牧師

多くの方が「福音書」から読み始めて、少し聖書の知識などが蓄えられてくると「使徒言行録」や「手紙」へと読み進めていくのではないかと思う。つまり「福音書」でイエスさまと出会った弟子たちが信仰を養われ、「使徒言行録」で宣教活動に出かけ、その結果与えられた教会との交流が「手紙」という形で残されているのではないかと思いを馳せる。

ところが年代だけを比較すると「手紙」「福音書」「使徒言行録」という順に記されている。つまり伝道の過程で相手を励まし厳しく指導する様子が「手紙」に残され、その結果設立された教会での読み物として「福音書」や「使徒言行録」が記されていく。ということは「手紙」からは教会誕生前後の生々しい背景を知ることができるし、「福音書」にはすでにそこにある教会の姿がうっすらと透けて見えてくる。当時の教会の姿を想像することは福音書を理解するのにとても役に立つ。同じ言葉が繰り返されるのはその教会の、もしくは執筆者の口癖だったのだろうなとか、当時の信仰者たちの息吹を感じることができるからだ。

福音書の執筆は十字架と復活から約４０年後のことである。イエスさまと直接交流のあった人々が迫害で、また寿命で天に召されていったことが大きな執筆動機である。旧約聖書の大半がバビロン捕囚期に記されていることからも分かるように国や民族に危機が迫ると人は何かを、

自分たちの根幹に関わる部分について残したくなるらしい。

先日、この味だけは継承しておきたいと思うレシピを母に尋ねた。いい年をして今更という気もするし今だからこそという思いもあった。味はまぁまぁの出来で、何よりも「これでもう大丈夫」という安心感のほうが強かった。ちなみにその味というのは「お雑煮」と「赤飯」でどちらも家族の楽しい思い出がつまっている。実は味を知りたかったのではなくて、思い出を確認したかっただけなのかもしれない。

讃美歌あれこれ

賛美歌あれこれ　　Ｆ・Ｊ姉

一人一人お好きな賛美歌の背景には、過去、現在、未来の生活、人生が有ると思います。その曲を聞くと何かを思い出す、情景が甦る、聖書のみ言葉が浮かぶ……。旋律の美しさは勿論ですが、その歌詞は神のみ言葉と人間の思いが凝縮されていて、我々の魂に響きます。賛美歌の歌詞に支えられたり、励まされたり、慰められたりします。賛美歌の中でも私の心に良く浮かぶ数曲について紹介します。

中学生の時、ある先生の葬儀で歌われた賛美歌の歌詞に号泣しました。54 年度 489 番、きよき岸辺にやがてつきて、です。特に３節は、歳を重ねた今こそ慰めと希望を与えてくれます。この世を去ってもやがて愛する人たちと会う事が出来ると信じさせてくれています。

２０年程前、私は巷の人々の声に心を乱され苦しい経験をしました。その頃支えになった賛美歌は二編157 番、この世の波風さわぎ……です。

最近の事としては放蕩の限りを尽くした神学者アウグスティヌスは母親が自分の為に、涙して祈る姿を見て回心したとの祈祷会でのお話から、54 年度 510 番、母は涙乾くまなく、祈るとしらずや、です。

そして、今はまさに芽吹きの時。球根のなかにはでしょう。コロナの影響で数年間歌う事は制限されていて、賛美歌は１節のみでした。何とも気持ちが未消化でしたが、やっと間もなく全節歌えると思います。美しい旋律にのせて、歌詞を味わいながら、その時に湧く感情を大切にして歌っていきましょう。会衆をリードし、支えて下さる奏楽者の皆様に感謝致します。

増築等教会建物利用について

展示会の開催　ひとつの灯り～伊藤美穂氏個展
瀬戸永泉教会見学会　　Ｋ・Ｒ長老

去る　2/4(土)　5(日)　11(土)　12(日)　18(土)　19(日)　3 週の土日にわたって新しく増改築されました教会内で初めて外部主催の催し物が行われました。時間は 13:00～17:00 として礼拝に影響が出ない時間帯での開催でした。

今回目的は展示会を通して新しくされました瀬戸永泉教会を地域、一般の方に紹介することです。

主催は教会建築に大きく携わっていただいた㈱柳澤一級建築士事務所です。

アーティストの伊藤美穂氏は愛知県立芸術大学出身で自然や動物の描く作家で、今回は手のひらサイズのロウソク灯をモチーフとされ、教会の雰囲気にマッチした素晴らしい空間となった展示会を持つことができました。

来場者の人数は 61 名でした。＊当教会員やご本人、関係者は含まれていません。

内訳は近隣住民、アーティスト関係知人、建築関係者、他教会の方、観光客などになります。

今回の展示会はリニューアルされた瀬戸永泉教会を近隣の方々も含め広く一般の方に知っていただく良い機会となったのではないかと思います。以前、教会学校に通っていて久しぶりに教会に来てくださった方も足を運んでくれたようです。主が招き、そしてまた教会に繋がってくれることを心から望み、お祈りしたいと思います。

＊今回はプロのアーティスト(画家)ということもあり、展示販売も行われました。利益の一部を献金として捧げていただいています。

★長老会としては教会に足を運んでいただくため、神様の招きとなることを肯定的に考えていこうという姿勢となりました。教会側として営利を目的としないこと、ただし利用される方が生活のために入場料や販売活動をされることは否定的にならない。教会が責任をもって当日担当される方を認めることできること。催し物終了後に掃除など原状回復していただくことなど。ルール化して使用申請書等を作成していきます。伝道の一環として建物の有効活用していただければと思っています。

＝編集後記＝

イースター、おめでとうございます。新しい年度が始まりました。新型コロナウィルスも感染が減少するも、もう少し様子見して愛餐会は行いません。しかしながら、イエス様のご復活の喜びを心から一緒に味わいたいと思います。教会のリニューアルも終え、今年度は伝道活動に注力してともに励んでいきたいものです。昨年は池田姉、今井姉の２人の転会者が与えられました。神様の導き、本当に感謝です。トルコ、シリアの大地震の被災者の方、今尚、戦いが終焉しないウクライナの方々に神様の慰めと励ましがありますように心を合わせて祈っていきたいです。今回も原稿お願いしました方々、ありがとうございました。　　アーメン

Ｋ・Ｒ

日本キリスト教団　瀬戸永泉教会
牧師　横山　厚志・小椋　実央
〒489-0822　瀬戸市杉塚町５
電話、FAX：0561－82－2314
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ：瀬戸永泉教会で検索または⇒